

夢野久作「押絵の奇蹟」論―迷信・科学・文学

山口 俊雄

横溝正史の戦後の代表作の一つである「悪魔の手毬唄」(『宝石』一九五七・八―一九五九・二)に次のようなくだりがある。

この地方のいいつたえのひとつに、妊娠中の母親があまり強い火の気、たとえば火事のようなものをみると、うまれる子に赤痣がつたわるといふのがあるが、里子の母のリカは里子を腹にもっているあいだに、囲炉裡に首をつつこんで死んでいる良人の、相好のみわけもつきにくいほど、無残に焼けただれた顔をみているのである。そのときの強いショックが胎児に影響して、里子の赤痣となったのであろうと、村のひとたちのよい語り草になつている。

二〇年前に起きたこの〈良人〉の殺人と切り離せない形で新たな連続殺人事件が起こつてゆくというのが物語のあらすじで、痣の衝撃性が真犯人の動機の切実さと切り離せないのだが、注意したいのは痣に関わる言い伝えについてである。迷信調査協議会編『迷信の実態(日本の俗信Ⅰ)』の「第三章 縁起、言い習わし集」に挙げられている妊娠中に関わる迷信・俗信の中でもこの〈妊婦が火事を見るとその子にアザが出来る〉の分布は広範である。同書には

「二つ続いている物を食べると双子を生む」、《「妊婦が」炭をまたぐと黒い子が生れる》など多岐にわたる迷信・俗信が取り上げられているが、文化・風土によって具体的内容は異なるとは言え、この手の妊婦の禁忌に関わる迷信・俗信は世界中に分布している⁶⁵。

このような俗信・迷信は広く《胎教⁷⁾》の中に括り込むことができるが、右「悪魔の手毬唄」におけるような、特に視覚を通じた母胎への強い心理的印象が胎児の身体にまで影響を及ぼすという言説を《視覚的胎教》言説と呼ぶならば、本稿で主題的に論じる夢野久作「押絵の奇蹟」(「新青年」一九二九・一)もそのような《視覚的胎教》言説を物語の支えとした作品であると説明することができる。語り手の井ノ口トシ子は、自分の母と想像上の「本当の父」との間に性的な行為がなかったことを願ひ、その願望を支えるためにそのような言説に縋り付くのである。

そもそも出生という母親にとっても生まれて来る子にとっても一つの大事業と言うべきイヴェントをめぐってはさまざまな物語が生じやすいが、その一つとして《出生の秘密》Ⅱ《ファミリー・ロマンス》という物語類型がある。結核罹患、不義密通、服装倒錯(女装、男装)、異性嫌悪、近親相姦的感情……さまざまなトピックを錯綜させ凝縮させた作品であり、さまざまな観点から興味深く読み解くことができる「押絵の奇蹟」ではあるが、本稿では、《出生の秘密》Ⅱ《ファミリー・ロマンス》という物語を支える《視覚的胎教》言説——これまでは《ホラ話めいた理屈》⁸⁾あるいは《まことしやかな与太》⁹⁾と片付けられてきた——に着目し、そのような言説の由来や妥当性についても吟味も行ないつつ、小酒井不木の作品をはじめとする他の文学作品も視野に入れて「押絵の奇蹟」を考察し、迷信・俗信・伝承と科学との交錯の中から物語性を汲み出す文学作品として「押絵の奇蹟」の位置付けを試みたい。

一

「押絵の奇蹟」について具体的に検討する前に、その先行作としておそらく夢野に影響を与えたと思われる小酒井不

本のいくつかの作品を見ておこう。

「印象」〔「新青年」一九二六・六〕³⁰では、妊婦が、北斎の《藍摺の鬼の絵》を《壁にかけて朝夕ながめて居たならば、きつと生れる子は、鬼のやうな恐ろしい顔をして居るか、或は少くとも、藍色の皮膚をした子が生れるだらうと思ふ》との説明のもと視覚的《胎教》を實踐する。進行性の肺結核を患うこの外交官夫人は、夫の放蕩への復讐にそのような子を生み残したいと言うのである。果して、自分の命と引き換えに生まれた子の眼は藍色であった。この女性の主治医だった語り手は、《視覚的胎教》という《超自然的な理由》を口にしていた女性が抱えていた《もつと常識的な、もつと現実的な理由》——白人の男と密通していたために日本人とは違う外見の子が産まれる見通し——に思いついた。

「赦罪」〔「新青年」一九二七・一一〕では、《オセロなどは足もとにも及ばな》³¹いほど嫉妬深い夫への反抗心から姦通を犯し子を宿した妻が、不義の子であることが露見しないために夫と同じく片方の眼が失明している子を生むための方法を医学博士である夫の蔵書に探り、ある書籍の記述から、夫の顔を見続ければ良いと示唆を得る。結局、生まれた子は両眼とも瞎眼であった。《第三者の嵐がまじつて居ないことを確かめ》³²るために血液型を調べようとした夫だったが、子の額の上に自分の蔵書印そのままの痣を見つけて自分の子だと納得する。

《視覚的胎教》が、「赦罪」では妻の予想とは違う形ではあるものの成功した形になっている一方、「印象」では成功していないという違いがあるが、そこには、「印象」の語り手が医者であることが関わっているのかもしれない。作者不木の医学者としてのスタンスも託されていよう。他方、「赦罪」は、全体的にデフォルメが強く、意外性を狙ったナンセンス小説という趣が濃厚で、そのような作風の中で《視覚的胎教》言説も機能しているのであろう。

ただ、どちらも妊娠・出産をめぐる人間の情念を浮き上がらせるために《視覚的胎教》を配している点は共通している。「赦罪」の夫はその所有欲の強さのあまり蔵書の各ページに蔵書印を押し、不義の露呈を恐れる妻は必死の思いでそんな蔵書に眼を曝していた。「印象」の妻は、外国人の風貌だけでなく鬼の形相までわが子に与えて、夫を苦しめ

たいと考えたのである。

ところで、「赦罪」には次のようなくだりがあった。

夫人はひそかに博士の書齋にはいつて、片眼の子を生む方法はないものかと、片つ端から書物を葉繰つた。外国語を辛うじて読むことが出来たのは、夫人にとつて幸福なことであつた。

すると夫人は、ある英書の中に、次の文句のあることを発見した。

……most of the children born in adultery have a greater resemblance to the legal than to the real father.

さうして、そこにはなほ、「adulteryの子は母の罪を赦す」といふ外国の諺が書かれてあつた。「罪を赦す」とはくすぐつたい言葉であるが、夫人は、これを読んで幾分か安心した。

ところが、更に、夫人は、そこに挙げられてある例を見て、安心の度を増した。それは、一八六八年発行の American Journal of the Medical Sciences にミチエル氏が報告したものである。

数人の子をもつた黒人の女が白人と通じて妊娠した。子が生れ、ば、罪は立ちどころにあらはれるから、彼女は大に心配した。ことに彼女の良人は両手とも六本指の不具者で、至つて嫉妬が強かつたから、その煩悶は甚だしかつた。すると、月満ちて子が生れた。生れた子は、黒白まだらなミユラトだつたが、両手の指は六本づつあつた。良人が満足したのは言ふ迄もない。

《ある英書》とあるが、具体的には George M. Gould and Walter L. Pyle, *Anomalies and curiosities of medicine* (6) である。右の作中の言葉は、同書の次のくんだり（特に下線部）を踏まえている。

After citing the foregoing examples, [Brunton] Blaikie directs his attention to man, and makes the following interesting

remarks:-- [...] "But it is not only in relation to color that we find telephony to have been noticed in the human subject. Dr. Middleton Michel gives a most interesting case in the American Journal of the Medical Sciences for 1868: 'A black woman, mother of several negro children, none of whom were deformed in any particular, had illicit intercourse with a white man, by whom she became pregnant. During gestation she manifested great uneasiness of mind, lest the birth of a mulatto offspring should disclose her conduct. . . . It so happened that her negro husband possessed a sixth digit on each hand, but there was no peculiarity of any kind in the white man, yet when the mulatto child was born it actually presented the deformity of a supernumerary finger.' Taruffi, the celebrated Italian teratologist, in speaking of the subject, says: 'Our knowledge of this strange fact is by no means recent for Fienus, in 1608, said that most of the children born in adultery have a greater resemblance to the legal than to the real father'—an observation that was confirmed by the philosopher Vanini and by the naturalist Ambrosini. From these observations comes the proverb: Filius ex adultera excusare matrem a culpa.'^s

また、「印象」の妊婦が北斎の鬼の絵を夫への復讐のために役立てようとしたのは、へかつて、私は、ギリシャの昔ある国の王妃が、妊娠中、おのが部屋にかけてあつた黒人の肖像画を朝夕見て居たら、つひに黒い皮膚の王子を生んだといふ話を何かの本で読んだことがあ^る」ったからであるが、このエピソードも *Anomalies and curiosities of medicine* 所載である。

Hippocrates saved the honor of a princess, accused of adultery with a negro because she bore a black child, by citing it as a case of maternal impression, the husband of the princess having placed in her room a painting of a negro, to the view of which she was subjected during the whole of her pregnancy.⁸

不木の旧蔵洋書から成る「小酒井不木文庫」(愛知医科大学附屬図書館)に右の書籍が含まれており、また、この書籍の名前は、不木の「科学より観たる犯罪と探偵」(博文館、一九二三)「序」に田中香涯「医学に関する奇談異聞」や高田義一郎「法医学」とともに掲げられた十四冊の参照文献の一つとして挙げられており、これらの点からも、不木がこの書籍を参照したことは明らかである。

この書籍の特徴について少し確認しておこう。

扉に記されている内容紹介文に「Being an encyclopedic collection of rare and extraordinary cases, and of the most striking instances of abnormality in all branches of medicine and surgery, derived from an exhaustive research of medical literature from its origin to the present day, abstracted, classified, annotated, and indexed」とある通り、古代から現代に至までの医学的文献を博搜し、異常性に関わる顕著な事例を多数の図版とともに百科全書的に収載した書籍である。

「序文」で、人体の異常、通常と異なった形態への人間の根強い関心を述べたあと、そのような異常の集大成がこれまでなかったのが、古代から近年に至る文献を博搜してこの書をまとめたこと、紹介されている事例を知っておくことは、単なる人間の好奇心を満たすにとどまらず、今日の医学者・法医学者にとっても大変有用であること、等が述べられる。

実際、百科全書的な網羅性をここまで徹底した書籍は今日に至るまで類例がなく、初版から百年以上たった今なおペーパーバック版も含め刊行されている。その後の医学的知見の大幅な更新にも関わらず、その資料集的価値が評価されていることであろう。

同じく「序文」中には、明らかにおかしい記述は採用しなかったが、紙幅の都合もあって採用したものについて十分に論じてはいない、との断りもある。論断が少ないことは、読者にとって想像を逞しくするヒントとなりやすかったとも言えるかもしれない。

〈例えば、バレがある怪物を描き出すとき、私たちは、彼の絵や彫刻の技術を信用せず、彼の持つ奇形学的知識の未

熟さが、驚異愛好家の誇張や發明とも相俟っていることを斟酌するかもしれないが、彼が、戦場や解剖室で同僚たちとともに見たものを文章中に記述したとき、私たちは、適切な範囲内で彼を信用するのである。」（引用者試訳）と「序文」中（53）にあるが、不木が小説家として、一種のネタ本としてこの書籍を活用したとき、そこに求めていたのは医学的に正確な知識よりも、むしろ「怪物」の図像であつたと言えるかもしれない。

先に見た小説「印象」「赦罪」以外にも、不木は「胎教」に触れた文章（エッセイ）を残している。「妊婦の精神感動と胎児」および「所謂「胎教」について」であるが、いずれも右の *Anomalies and curiosities of medicine* の CHAPTER II の Maternal impressions の段から引き写しに近い形でエピソードを紹介している。不木旧蔵の同書のこの Maternal impressions の段がちょうど始まる箇所のパージ余白には不木の筆跡で「妊婦の精神感動と胎児」という書き込みがあり、同題のエッセイを準備する中でこの書籍に当たったことが窺われる。

「妊婦の精神感動と胎児」は *Anomalies and curiosities of medicine* をもとにしたエピソードの列挙の前に「医学が現今の様に、発達しなかつた時代に於ては、生れて来た児に現はれて来る、異常なる現象假令ば瘧とか黒子とか或は其他いろ／＼の畸形は妊婦が妊娠中に受けた色々の印象や、精神感動が基となつて、起るものであると考へられてゐた。然しながら現今に於ては、それらの現象に対しては何れも、相当の説明が付けられて居るのであつて、最早現今の人々は無暗にそれを信じなくなつたのである。／ 所が文献に現はれた、色々の事実に徴してみると、通り一べんの説明丈けでは頗る物足りないでどうしても矢張り、母の受けた精神感動が胎児に印せらるゝものだと説明しなければならぬ様になつて来る。乃で私は「何故」といふ理由には立ち入らないで、昔から報告された珍しい例を左に書き並べて見様と思ふのである。」という言葉を置き、列挙のあとに「以上書いた様な例の中にはもとより間違つて観察されたものもあるであらうけれど、或程度迄は妊婦の精神感動が、その胎児に及ぼす影響を認めなければならぬ。無論妊婦の個性に依つて違ひ、どの妊婦にもかゝる事が起り得るとは言ひ得ないけれど、特殊の人にはその可能性を否定する訳にはいかないであらう。／ 昔から支那では胎教といふ事がやかましく言はれて、妊娠中女子の総ての動作を

慎しみ且修養に関する書を読んだといふ事であるが、あながち理由の無い事ではないと思はれる。然しどういふ生理的作用で精神感動が胎児に影響するかといふことは無論説明することは出来ない。又それを説明する目的で私はこの一篇を草した訳ではなく、只古来の文献に現はれた例を書き例ねたのに過ぎないのである。」という言葉を置いている。

古来語り残されてきた妊婦への精神感動が胎児に印されるというエピソードについて、荒唐無稽と全否定することはしないものの、科学的な説明が用意されていないことを断わるといふ慎重な態度である。

この点は、先に見た小説作品である「印象」の語りの姿勢とほぼ同様のものである。医学者としての冷静な判断と、小説家としての人間の精神・心理のありようへの関心と、両面を兼備しながら書くという姿勢である。精神・心理のありようをデフォルメし、科学を逸脱して怪奇にまで持つて行けば「教罪」のような作品も生まれよう。荒唐無稽と一概に片づけてしまわないところに小説家を営む余地も確保されたわけである。

科学では十分に説明されていないと慎重に留保を付けつつ、しかし古来語り継がれてきた興味深いエピソードを全否定しないところに物語を紡ぐ余地を残すという不木の姿勢を継承しながら、そこに書簡体（一人称独白体）という語りの工夫を導入することにより、ごく短い短篇にしか仕立てなかつた不木とは対照的に、まとまつた長さとお興行きを持った中篇小説にまで仕立て上げたのが、夢野久作であつた。章を改めてその作品を論じることになろう。

二

(1)

まず、「押絵の奇蹟」という作品が、全編、一人の人間が記した一通の書簡という形式、一人称独白体の形式を取つ

ていることに注意しておきたい。

そのような形を取っている以上、あくまでも手紙の書き手であるトシ子の立場から物語が語られており、読者は、そのようなトシ子の視点で綴られた言葉を通して、トシ子が、事実を歪めたり、嘘を言ったりしている可能性も考慮し、適宜、述べられていることに調整・修正を施して客観的事実を思い描きながら、物語を読み進めることになる。

この物語は、中村半次郎に恋文的要素も持ちつつ宛てられた手紙の形式を取り、この手紙の中で、トシ子は、自分が母の不義——相手は半次郎の父親の珊玉——によって生まれた子どもではないことを証そうとしている。

東京の歌舞伎女形役者・中村珊玉（半太夫）の役者絵（博多での実際の舞台も母は見ている）とトシ子とをモデルに母が作った犬塚信乃の押絵とを見比べた父が、母と珊玉との《不義》を信じ込む。

「俺は今日がきょうまで知らなんだ。けれども最前あの櫛田神社の額を見ながら、人の噂をきいているうちに、あの犬塚信乃の押絵の顔が、中村半太夫の舞台に生き写しであることがわかった。そればかりでない。貴様の作った人形の顔が上物じやうぶつになればなる程、中村半太夫に似ていることも、そこに居った人の噂で初めて気が付いた。コヤツ（私）の眼鼻立ちが中村半太夫と瓜二つになっていることは近所の子守女まで知っていることもあの絵馬堂で初めてきいた。……この年月貴様に子が生まれぬわけも今はじめてわかった。……キ……貴様は、よくもよくこの永い間俺に恥をかかせおったナ」

これに対して母は、《不義を致しましたおぼえは毛頭御座いませぬが……この上のお宮仕えはいたしかねます》と言うだけで釈明はしない。母とトシ子とを刀で串刺しにし、父は切腹する。助かったトシ子は、鏡に写った自分の顔が、押絵の犬塚信乃の顔、あるいは半太夫の顔をモデルにした押絵の阿古屋の顔、あるいは母親の顔に似て見えることを日々意識しつつ過ごし、高等小学校卒業とともに、珊玉に会って母との不義がなかったことを確認しようと故郷・

博多を離れる。

結局、生前の瑠玉に会うことはできず、歌舞伎雑誌の記事から、瑠玉が博多に来て母に会ったと思われる頃に結核に罹つて体調を崩したこと（母は結核の血筋とされている）、瑠玉と半次郎とが父子であることを知り、瑠玉と自分とが、また半次郎と母とが似ていることなどを雑誌の写真で確認する。つまり、不義の不在を証明しようとして上京したにも関わらず、むしろ不義の証拠を次々と得てしまふ。

中村半次郎様と私とは、お話にきいた事のある夫婦^{めとご}だつたに違ひない。一人はお母様に似て、一人はお父様に似た双生児^{ふたご}だつたに違ひない。そうしてお母様は私達二人をお生みになると間もなく、お父様に知れないように男の子の方を本当のお父様の処へお送りになつたので、そんな事を何もかも引き受けてお手伝ひしたのは、あのオセキ婆さんだつたに違ひない。そうと考えるよりほかに考えようがないのをどうしましょう。

「ああ。中村瑠玉様……あなたはそれほどまでに私のお母様を……そして又私のお母様も……」
と叫びかけて私はハツとしながら、自分の手で自分の口を押えました。

こうして、トシ子は、自分がやはり不義の子であつたと確信し、母の最後の言葉は自分を助けるための嘘だつたと解釈する。

ところが、ある日たまたま「八大伝」の脚本を手に取り、伏姫様が夫と立てておられる八つ房という犬に身を触れずにみごもられた」というくだりに接し、〈男と女とが、お互いに思い合つただけで、その相手によく似た子供を生んだり生ませたりすることができると〉〈奇蹟的な喜び〉を覚える。そんなことが本当にあることなのかを確かめるためにトシ子は〈上野の図書館〉（帝國図書館）に通い詰め、〈むずかしい産科の書物や心理学の書物を何十冊ほどめくら探りに読み〉あさる中で、〈遺伝の事を書いた書物〉に書かれてあつた〈女の児は男親に似易く、男の児は女親に

似易い」という言説に意気阻喪したりもするが、医学博士の石神刀文が〔明治二十年頃に西洋の書物から翻譯なすつた〕『法医学夜話』「第五章 妊娠の妖異 その一 妊娠奇談」の中の二つのエピソードに行き当たつる。⁸³

一つは、古代ギリシャの一王妃が、王に似ない色の黒い子どもを生み、不義を疑つた王に監禁されるが、アテネのヒポクラテスが、〈妊娠中の婦女子が或る人の姿を思い込み、又、或る一定の形状色彩のものを氣長く思念し、又、凝視する時は、その人の姿、又は、その物品の形状色彩に似たる児の生まるべき事、必ずしも不合理に非ざるべきを、例を挙げ証を引いて説明〉したので、寢室に掲げられていた〈先王の身代りとなりて忠死せし黒奴の肖像画〉を、妊娠中、王妃が繰り返し眺めていたために起つたことだと分かつたというエピソードである。

もう一つも、十九世紀後半にスコットランドで起つた同様の出来事で、やはり妊婦が始終眺めていた肖像画の面影を宿した子どもを生んだというエピソードである。

トシ子の母は押絵作りのために中村瑠玉の役者絵を繰り返し見ていたわけだから、トシ子は、これらのエピソード、〈視覚的胎教〉の歴史的実在を物語るエピソードを、母の不義を否定してくれるものと受け止め、〈あなたのお父様と、私のお母様とは唯一眼で恋に落ちられました。そうしてお互いにその恋しい人の姿を、胸の底に深く秘められたまま、寝ても醒めてもお忘れになりませんでした……その思いがお兄様と私の姿にあらわれて、お二人の思いを遂げるためにこの世に生き残っているのでは御座いますまいか。〉と考える。

しかし、真相を半次郎はとづくに知っているのではないかと考え直し、思いは千々に乱れて定まらない。本当の兄妹であるならば、私のことは忘れて、無事生き残つて、〈お母様の芸術をこの世にあらわして下さいますように〉と述べる。他方、〈血を分けた兄妹で御座いませんでしたならば、〉〈あなたのお父様と、私のお母様の恋は、世にも上なく清浄なもので御座いました。／　そうして永久に氣高いもので御座いました。／　どうぞどうぞお兄さまと私の恋も、そのようにいつまでも氣高く、清浄に、悲しくておわかりますように……。〉と求愛の情の存在とその断念とを述べる。病状悪化している結核も強いブレイキになっている。

手紙の終わり近くには、〈今一度お会いしたい……〉とあり、兄妹としてなのか、恋人同士としてなのか、真情のありかは必ずしも定かではないが、いずれにせよこの切ない思いの表白とともに文面は終わっている。

この切ない、トシ子の主観的「真実」とともに語られた手紙を、しかし、読者はどのように読めばよいだろうか。トシ子の思いにどのように付き合つてゆけばよいだろうか。

トシ子が目指したのは、自分が不義の子ではないことを確かめることだったはずであるが、叙述を追つてゆく読者の前に明らかにされたのは、トシ子が望んだ不義の反証よりも、不義の反証の乏しさであり、むしろ不義の証拠がいやおうなく浮かび上がつて来たと言ふべきであろう。

トシ子が言わば一発逆転的に縋り付いた反証は、虚構である「八大伝」と、『法医学夜話』に紹介されていた〈視覚的胎教〉とのみである。これらの記述を信憑性のないものと退けてしまえば、どうなるだろうか。父がそう思い、博多っ子の手鞠歌が〈主は誰ともおしやらばおしやれ。／生んだその子にシルシはないが。／思つたお方にチョット生きうつし。〉と当てこすり、トシ子も認めざるを得なかつた瑠玉とトシ子の顔の類似、父が指摘しているようにトシ子のあとに子が生まれなかつたこと、瑠玉の結核罹患のタイミング、瑠玉が博多に来てからちょうど十ヶ月余りでトシ子半次郎が生まれたこと、自らも十人近くも子を生んだ産婆のおセキ婆さんが臨月の母の腹を見て〈これは大きい。よっぽど大きな男のお子さんに違いない。〉と言つたこと（双子だつた可能性を示唆）……といった事柄が、それぞればらばらに見れば単なる偶然と見えるにもかかわらず、その集積によつて物語することは不義の証拠・状況証拠以外の何物でもあるまい。

しかし、トシ子は、〈視覚的胎教〉言説に縋り付こうとした。これには、不義説を否定できれば、母の潔白と、みずからの半次郎への恋愛の権利と、二つながら成立させられるということが大きかつたであろう。手紙の文面では、自分が結核に罹っている以上、たとえ血のつながりがなくても一緒にするのは無理だと言つているが、見舞いに来た半次郎が〈その病氣はキット僕がなおして上げる。君さえ承知してくれば君は僕の妻だ。〉とトシ子に言つたというの

が事実だったとすれば、一緒になることも全然不可能というものでもあるまい。

(2)

では、トシ子が縋り付こうとした〈視覚的胎教〉言説の信憑性はどうかだったか。

作中に名の挙がる『法医学夜話』はその実在を確認できない書物であるが、作中に紹介されている記述は、先に小酒井不木の参照文献として見た *Anomalies and curiosities of medicine* と重なるところが多く、夢野がこれを踏まえた可能性も考えられる。この書籍は、先述の通り、不木の「科学より猥たる犯罪と探偵」「序」に掲げられた参照文献の一つであり、例えばそれを経由点として夢野がこの書籍を参照したということも考えられよう。

古代ギリシャの王妃の話が *Anomalies and curiosities of medicine* に載っていることについては、既に前章で不木「印象」を論じた際に触れたが、ただし、「押絵の奇蹟」ではかなり細部が書き加えられている。続く十九世紀後半のスコットランドでの出来事はこの書物に紹介されておらず、管見の限りでは類書にも見当たらない。ひとまず夢野の創作と見ておきたい。

へ——生物の親子の外貌性格の相似は、その親の心理に潜在せる深刻なる記憶力が、その精虫と卵子とに影響したるものに外ならず——直接の父母以外の、他人に酷似せる子が、姦通の事実なくして生るる事あるはこの道理に依るもの也——²³と云う記述は、*Anomalies and curiosities of medicine* 中の次のくだり（テレゴニーについて想定された三種類の説明の一つ²⁴）と若干似ている。参照した可能性もあるう。

(1) The imagination-theory, or, to quote Harvey: "Due to mental causes so operating either on the mind of the female and so acting on her reproductive powers, or on the mind of the male parent, and so influencing the qualities of his semen, as

to modify the nutrition and development of the offspring."

ただ、注意しておかなくてはならないのは、これは基本的にテレゴニーと呼ばれる現象——下田次郎「胎教」では「婦人が夫と離縁して、他の男子に嫁し、余程間を置いて生れた子が、先の夫に似て居ることをテレゴニー（感応遺伝）といひます」と説明される——の原因説明として述べられているのであつて、夢野が「法医学夜話」において語っているような「視覚的胎教」の説明としてではないということである。夢野は、「視覚的胎教」の二例の後に、馬のテレゴニーの例（これも、似たような記述を *Anomalies and curiosities of medicine* に見出せる）を挟み、視覚的な印象が妊婦を通じて胎児に影響を与えることと、テレゴニーとに共通する因果論的説明と位置づけている。

そのようにしておくことで、おそらく、不義否定説が抱える一番の難点、瑠玉がトシ子の母ではない別の女性にトシ子の母の面影を持った子どもを生ませるといふ点が、ナンセンスとならないように配慮したのだと思われる。*Anomalies and curiosities of medicine* でも、*maternal impressions* に割く紙幅と例の豊富さに比して、*paternal impressions* に割く紙幅は極めて小さく、たった四例の紹介に留まり、うち三例までが父子ともに片方の目が失明しているとか膝に障害を抱えているというようなものであり、父親の受けた視覚的印象が子に影響している例は一つもない。古来の奇談異聞からちよいと良い例を引き出すことができないならば、右のような原理的説明を掲げておくことでしのいでおくほかあるまい。

この通り、作中の「法医学夜話」が夢野による全くの作り事というものでもなく、相応の根拠を持つ言説であること、決して単なる「ホラ話」（松山巖）あるいは「与太」（多田茂治）ではないことが、明らかに¹⁰⁴なったが、ならばそのような言説が、当時、どの程度受入れられていたのか、当時流通していた「胎教」言説の実態を瞥見するために、大正から昭和にかけて二十五年以上にわたって重版を重ねたロングセラー、下田次郎「胎教」¹⁰⁵（書誌的事柄は後掲）を取り上げてみよう。

「胎教」というタイトルながら、この書籍は、単に妊婦に英雄の肖像を見よ——「押絵の奇蹟」作中でトシ子の父が行なった《胎教》がまさにこれで、男児と決め付けていた父は《楠正成の討死とか、白虎隊の少年の切腹とか、上野の彰義隊の戦争とか、日本武尊が熊襲を退治していられるところ》の《石版絵》や《西郷様の肖像とか高山彦九郎の書いた忠の字》を飾っていた——とか、行いを慎めといった事柄（すなわち、古来言われて来た中国伝来の《胎教》）のみを説いたものではなく、「一 妊娠の喜び」「二 婦人の讚美」「三 妊娠とは何か」「四 配偶の選択」「五 胎教の事」「六 胎教に関する意見」「七 胎教に関する事実」「八 文学に現はれたる胎教」「九 胎教に関する伝説」「一〇 胎児の發育」「一一 精神の身体に及ぼす影響」「一二 女子特に妊婦は感動し易し」「一三 胎児の精神生活」「一四 妊婦の身体」「一五 妊婦の心」「一六 妊婦の感想」「一七 胎教に関する妊婦の心掛」「一八 妊婦と夫」「一九 妊婦と舅姑」「二〇 妊婦と家庭」「二一 妊婦と親類近所」「二二 妊婦と住所」「二三 妊婦と社会」「二四 妊婦と自然」「二五 妊婦の身体の衛生」「二六 産婦の看護」「二七 生児の養育」「二八 乳母の事」以上全二十八章から成り、妊婦がどのように振舞いどのような環境に置かれるべきかということを中心として、妊娠・妊婦に関する諸事を広く取り上げた一種の育児書となっている。

本稿の関心から特に興味深いのは、「七 胎教に関する事実」「八 文学に現はれたる胎教」「九 胎教に関する伝説」あたりである。「七」では、妻が息子・東涯を身ごもったとき伊藤仁齋が經典を読み聞かせたことや、中村正直の両親が男児を授かるべく神仏に祈ったことや、出獄人保護事業に携わり「母と子——何うしたら子供をよく養われるか」(博文館、一九〇九)の著書がある原胤昭が提供する、同じ兄弟ながら、親が品行方正だったときに生まれた子が大番頭になり、親の生活が不安定だったときに生まれた子が大泥棒になった事例などを紹介し、《胎教》の大切さを説く。続く「八」では、ホフマン「スキュデリー嬢」とハーディ「夢見る女」のあらすじを紹介、これらの作品を踏まえながら次の「九」で、テレゴニー(先述)、フェルゼーエン (Verschuier)、《外物から妊婦の精神が感動されて、その物に似たものを生むことを独逸ではフェルゼーエンといひます》(、母斑(スチグマ)《妊娠中或物を見たりした為に、身

体の何処かに印を押したやうに、跡がつくことがあると、俗に言つて居ります」——本稿冒頭に引いた横溝正史「悪魔の手毬唄」や不木「赦罪」の例がこれに当る——といった現象を紹介した上で、次のように述べる。

さてこのテレゴニーとか、フェルゼーエンとか、スチグマとかいふ事実が實際あり得るものか、否かは、學問上では断言できません。研究的態度を以て説くには、成るべく控へ目に取つた方が安全でありますから、大胆にこれらの事実が、確かにあるものとしてまで、胎教の力を強めずとも可いのであります。定説でもないものを応援にするのは、晶眞の引倒しになりますから、私は唯だ斯る事を云ふ人もあるといふ紹介に止めるのであります。斯る事を見ずに置いても、胎教の大切なことはいへると思ひます。

つまり簡単に言えば、〈胎教〉と関連があるので触れたものの、このような極端な事例は學問的に（＝科学的に）証明されていないので、無視して良いという扱いである。文学作品の紹介などもありながら、結局、落ち着く先はこのやうな地点であつた。

医学者としての不木も、先に見た通りほぼ同様の態度と言つて良いだろう。現象を全否定しないものの、生物學的生理學的説明ができないので紹介にとどめておく、というのが医学者としてエッセイを記す不木の態度であつた。

夢野や小説家としての不木は、このような〈胎教〉を「學問的に」説く下田から排除される極端な事例、因果關係の説明が用意されていないとして医学者としての不木が紹介にとどめておく事例に目を付けたのであつた。

見て来たやうに、当時としても學問的、科学的に見れば周縁に位置すると言ふべき事柄ではあつたが、例えば、（一）体精子も卵子も感受性をもつて居るものであります。又化学作用などのやうな、余程強い力を發揮する程度の精神的感動の起つた際には、生殖物質に矢張り或る影響を与ふるであらうと考へらるゝのであります。」と主張する「東洋大

学教授」下澤瑞世「新胎教」のやうな書物も出版されていたことから分かるやうに、〈ホラ話〉（松山巖）あるいは

《与太》（多田茂治）と片付けてしまふのはいささか早計であらう。「押絵の奇蹟」に《ドグラ・マグラ》によつて完成される、作品構成における「因縁話」の系と「疑似科学」の系の相補的複合化という最初の試みが読みとられなければならない」と相応に妥当な指摘を提出する笠井潔の《疑似科学》というレッテルについても同様のことが言えよう。

(3)

と言つても、もちろん、迷信と科学との習合のような周縁的な言説に引き込まれる、あるいは縋り付くトシ子に、自分にとつて都合の良い「事実」のみを見、妄想的に物語を紡ぎ上げようとするバラノイア的な《半狂人》の面影があることは否定しがたい。

《とは申せ、そうした私の思いは、おおかた高い熱に浮かされておりました私の、まほろしでしか御座いませんでしたでしょう。》という反省的言辭なども、一見、書き手の冷静な反省能力を窺わせるかのようだが、かえつて、やはり文字通り《まほろし》かもしれないという立ち止まりを読者に促しもある。

既に見たように、トシ子のあとに子が生まれなかつたこと、産婆のおセキ婆さんが臨月の母の腹の大きいことを指摘したことなど、トシ子が手紙の中に記しながら、それが不義の証拠の一つとなりうることに気付いていないことがいくつもあった。トシ子自身が不義の証拠だと認識し彼女を暗然たらしめる事柄以上に、こうした言わば「語るに落ちる」事柄こそが、読者に真実のありよう・真相のありかを強く訴えて来ると言つても良いだろう。

そのあたりに注目すると、この書簡体の作品はいよいよ《狂人の手記》の様相を強く帯び始めるのである。

既にこの章の冒頭で、この作品が、全編、一人の人間が記した書簡の形式、一人称独白体の形式を取っていることに注意を促しておいた。そのような形を取る場合、一般に読者は、書き手（語り手）が、事実を歪めたり、嘘を言つたりしている可能性も考慮しながら物語を読み進める——叙述トリックものミステリの代表作アガサ・クリステイ「ア

クロイド殺人事件」(一九二六)が端的に示しているように、一人称語りは、嘘をつきやすい——のだが、書き手の信用度が低い場合、書き手の判断力や認識力に強い疑いが持たれる場合、読者は、語られている言葉を鵜呑みにせず、眉に唾を付けて書かれている内容を追うことになり、書き手の事実誤認や判断ミス等を想定しながら、そのような誤りを犯す書き手を〈狂人〉あるいは〈半狂人〉と認識しつつ読み進めることになる。

語り手を一〇〇パーセント信用するわけにはゆかないというのは、突き詰めれば、文学をはじめ、虚構一般について当てはまることだが、しかし、〈狂人の手記〉タイプは、信憑性の低さあるいは信憑性のなさそのものが作品世界成立の重要な条件となっており、語り手の提示する客観的事実から逸脱した、あるいは客観的事実を相対化してしまうような「歪んだ」世界像を読者は享受するのである。

夢野作品以外に、〈狂人の手記〉タイプの小説を探してみると、ゴーゴリ「狂人日記」(一八三五)、シュニッツラー「アンドレアス・ターマイアーの遺書」(一九〇〇)、魯迅「狂人日記」(一九一八)、芥川龍之介「二つの手紙」(一九一七)「疑惑」(一九一九)「齒車」(一九二九)、太宰治「人間失格」(一九四八)などが思い浮かぶが、多くの場合、読者は、語り手を単純に馬鹿にしたり侮ったり憐れんだりするのはなく、そのような「歪んだ」世界像を持つに至った語り手の生のありようから、人間の思いの切実さに触れ、強い印象を受けるのである。

乱歩が〈無解決の結び〉(「押絵の奇蹟」読後)「新青年」一九二九・二)と言う通り、確かにトシ子の書簡の叙述に則する限り、トシ子が不義の存否を断定できないでいる以上、〈無解決〉と言うべきであろうが、既に見て来たように、読者には、真相がほぼ一義的に認識できる形になっている。このことはやはりはっきりさせておく必要がある。

だが、そうであるにも関わらず、井ノ口トシ子の思いの切実さは、読者に一定の感動を与えずにはいない。このこともまた確かである。

もちろん、まずトシ子の母への思いの強さ、一途さが読者の心を動かすことは言うまでもないが、その内実は、〈不義〉の汚名を雪ぎたいという願望だけでなく、母の美しさや、母の技芸(針仕事)の芸術的とも言うべき才能への憧

れも伴ったものである。それはまた、《私のお父様は前にも申しますように色の黒い遅ましいお方で、どちらかと申せば醜男でおいでになったのに、お母様の方はまるでウラハラで、世にも珍らしく美しい方でした》⁶⁵というくだりからも窺えるように、母とは対照的な容貌であつた父、そんな美しい母を処断した父を否定したい思いと表裏一体であり、もし母が《不義》を犯していいのであれば、自分は母と母の思い人との間の思いの純度によって生まれた存在、言わば戸籍上の父の力が相対化された地点で生まれた存在であるということになるのであつた。

美しく芸術的才能に恵まれていたにも関わらず「不義」の汚名を着せられて、私という子を残して、幸薄くこの世を去つた母。そんな母の、名替挽回、頭影を目指すトシ子の思いは、そもその母の思い自体をかなえてやりたいという希望とも接続してゆく。そうしてもたげてくるのが、トシ子の半次郎への思いである。

自分たちが、もし不義の子であれば、半次郎は《お母様の芸術をこの世にあらわして下さいますようにと》トシ子から祈られる対象となるし、不義がなかったとすれば、《世にも上なく清浄なもので御座いました》《あなたのお父様と、私のお母様の恋》に自分たちも倣つて、《どうぞどうぞお兄さまと私の恋も、そのようにいつまでも気高く、清浄に、悲しくておわりますように……》ということになる。

ここで浮かび上がつて来るのは、《二代にわたる恋》という物語である。不義の有無に関わらず、ここまで来ると、トシ子の母と瑠玉とに想定される心の通い合いは、トシ子の半次郎への思いを正当化せずにはいない。結核が一応のブレーキになっているけれども、行動が妨げられているからこそ思いだけは一層募るという状況とも見える。所詮、笠井潔が言うようにフロイト的な《抑圧された無意識の欲望》⁶⁶が作用しているに過ぎないにしても、あるいは母および母の作りだした押絵を媒介にして自己愛を展開するナルシスティックな欲望がなせる業に過ぎないにしても、このような《二代にわたる恋》という物語を手繰り寄せるトシ子の心のありようはやはり人の心を打つものではなからうか。ちょうど、夏目漱石「趣味の遺伝」(一九〇六)における、戦死した河上浩と小野田の令嬢との一見すると一目惚れの的な悲恋を実は浩の祖父と令嬢の祖母との実らなかつた悲恋の成就と見ることが、語り手がそのために援用する

「趣味の遺伝」説のいかかわしにも関わらずある魅力を持つて読者の心に迫ってくるのと同様に。

このように自分の恋愛感情を正当化してくれるものとしてトシ子が見付けたのが、親の代からの〈二代にわたる悲恋〉というロマンティックな物語だったのであり、その際に纏り付いたのが〈視覚的胎教〉という科学的に必ずしも十分に説明されていない迷信的伝承のエピソードであった。

笠井潔は前掲論で徹底した観念批判者としての夢野久作像を提示しており、優れた小説はすべて小説批判であるという意味からも魅力的な論ではあるが、では、観念（物語）に翻弄されたトシ子を専ら批判することだけが「押絵の奇蹟」の主題だったのであろうか。観念批判（物語批判）として提出されたこの作品が、しかし、それ自体観念であり、虚構であり……ということを考えれば、トシ子は批判・否定されると同時にどこかで肯定されているという虚構の両義性を考慮すべきではなからうか。

このことは、別のもっと形式論的な言い方に置き換えることもできる。トシ子の妄想に過ぎなかつたのだと一応謎解きができるが、しかし、トシ子なりの妄想的理解にも一定の辻褄は合っており、だとすれば、そこには図地反転的にシロ・クロが入れ替わるリアリティが確保されていると言えるのではなからうか。そこにあるシロ・クロ反転可能性をもっと先鋭化し、真偽の宙吊りを徹底すれば「ドグラ・マグラ」（一九三五）となるのであろう。そもそも、夢野久作においては、先行作「あやかしの鼓」（一九二六）が、〈噂（言い伝え） Ⅱ 妄想〉が人を支配してゆくさまを描いていた。手記の体裁を取った作品の語り手と、手記の終わり近くに引用されている新聞記事と、どちらが真でどちらが偽か、真偽が反転可能に描かれている。おそらくこの作品も〈狂人の手記〉であり、語り手の意図とは裏腹に〈語るに落ちる〉部分が新聞記事なのだろう。

さて、これまでの考察を踏まえ、この章では、この《視覚的胎教》に関わる他の文学作品をいくつか見ることで、「押絵の奇蹟」のテーマの興行きと広がりとを確認しておこう。

まず、姦通の事実がないにも関わらず、妻が思った相手と子が似るというタイプの作品としては、ゲーテ「親和力」(一八〇九)、下田次郎「胎教」でも紹介されていたトマス・ハーディ「夢見る女」(一八九四)、石川淳「白描」(一九三九)などが挙げられる。

「親和力」は、トニー・タナー「姦通の文学―契約と違犯―ルソー・ゲーテ・フロベール」でも主題的に論じられているように、フロベール「ボヴァリー夫人」と並ぶ十九世紀姦通小説の代表作である。エードゥアルトとシャルロッテの夫婦が久しぶりに同衾した時、それぞれ思っている相手であるオットーリエ、オットーのことを思い描いていた。すると、月満ちて生まれた男児は、オットーリエにもオットーにも似た面差しであった。エードゥアルトは「この子供は二重の不貞から生れた子なのだ―この子供は、僕と僕の妻を結びつけるべきでありながら、その二人の間を断ち切ってしまうのだよ。」と叫ぶ。この面差しの相似について、作者ゲーテは、エードゥアルトやシャルロッテの主観においてのみのこととせず、周囲の人物にもそう見られたと実体化しているが、なぜそうなったかについての医学的・生物学的あるいは道徳的な説明・考察は一切示していない。

例えば、エミール・シュタイガーは、ゲーテが作品全体に仕組んだアンビヴァレンツに着目しつつ、子どもがオットーとオットーリエに似ていることは、子がかすがいとなって夫婦仲を取り戻すべきだというメッセージであるとも、《もはや実質を失ってしまった掟を解消することによって「結婚という」慣習を刷新することを要求している》とも取れる、と説明しているが、発表当時、賞賛の声が上がった一方で、《よくもこんな穢らわしい不倫の書を書いてくれたものだ》(「シャルロッテ」)子供の二重の類似とその原因にはすっかり憤慨しています。[略]この作品の要

をなしている、空想による例の二重の姦通は、いっそう腹だたしく、またいっそう唾棄すべきものです。……さらに癪にさわるのは、この小説の末尾が、「子どもの死をきっかけにオッティーリエがエドゥアールトへの思いを断ち、食を断って死んでゆくことで」肉欲的なものが精神的なものに変じたかのような体裁を取っていることです。あんなもの、私に言わせれば、邪悪な欲望の昇天にすぎません」といった厳しい批判も出ていたことに注意しておきたい。子どもの事故死と、オッティーリエのまるで聖女の如き死とが、精神的姦通という罪をあがなっていると読むのが一般的な読み方であろうが、精神的姦通ということに注目すれば、姦通概念の動揺について触れた「押絵の奇蹟」の中の「法医学夜話」の次の文言についても改めて注意することが必要になって来るだろう。

これを以てこれを見れば、古来貞操に関する疑を受けて弁疏する能わず、冤枉に死せし婦人の中にはかかる類例なしといふべからず。且つ、この判例と学説とを真理と認めて類推する時は、男子にても曾て恋着し、もしくは記憶せる女性に似たる児を、現在の配偶に生ましむる事が、あり得べき道理となり来るを以て、場合によりては男女間に於ける精神的の貞操の有無をも、形而下の諸現象、譬えばその児に現われたる特徴等によりて、具体的に証明され得るに到るべく従つて、法律上に於ける貞操の字義が現在よりも遙かに狭少厳密となり、道徳上より見たる貞操の意義と一糸相容れざるに到ると同時に、一方には這般の学理を逆利用する姦通の隠蔽事実が、陸続として現出する時代の近き将来に於て来り得べきことも、予想するに難からざる事となるべし。

というのも、トシ子は、《精神的姦通》は問題にしておらず、母と中村瑠玉との間に情事（性器性交）がなければ《清浄なもの》だったことになるとしてゐるからである。男性嫌悪を言うトシ子であり、性交嫌悪的なプラトニックな潔癖さを見ることが出来るが、トシ子が接した「法医学夜話」の論点が姦通概念の動揺、精神的姦通の問題性にまで及んでいるにも関わらず、それを読んでゐるはずのトシ子にこのような盲点を抱えさせたとくに、おそらく、トシ

子の思い込みの強さとその思考の一面性（つまりは妄想性、自己欺瞞性）に対する夢野の批評を読み込むことができる。

トマス・ハーディ「夢見る女」では、ある既婚の女性が、敬愛する詩人の写真を眺め暮らしたために、その詩人に顔や髪の毛の色がそっくりな子を生み、死んでしまった詩人の後を追うように死んでしまう。妻の死後に出て来た詩人の写真とわが子を見比べて、夫は、不義の子だと確信し、「あっちへいけ、このがきめ！ おまえはおれの子じゃないんだ！」と叫ぶ。姦通の事実がないことが作品世界中で確定的なこととされているので、客観的事実としては《視覚的胎教》ということになるが、夫は全く考慮だにしない。作者が信じている《視覚的胎教》の实在を、作中の夫は信じていない（知らない）という形である。

石川淳「白描」では、敬子が、敬子の今は亡き母自身や母の兄（中條兵作）の眼から見ても、母の思い人であった花笠武吉に似ていて、日記中に亡き母が《敬子はだんだんH氏「花笠武吉氏」に似て来るようだ。そんなことがと打ち消しつつ、げんにわたしの目の前にH氏に似てゐる敬子の顔があるのをどうしようもない。いつたい、神かけて夫よりほか知らないある女が妊娠中ひそかに、ひそかに、他のある男のことを思ひつめてゐたといふだけで、生れた子がその男に似るなんて、そんなことが此世にあるものかしら。》と吐露している。作中にさりげなく《原書のゲート全集》が配されており、これはおそらく「親和力」を踏まえたというシグナルなのであろう。

ただし、娘の敬子のほうは、花笠武吉に向かって投げつけた言葉の中で、《無慙にも、あたしがあなたに似てゐるとまで見なければならなかつたほど、あはれな母はあなたのことで一生いつばいでした。》と言っており、相似は母の主観に過ぎないと「常識的」に判断しているかのようでもあり、その点では、相似を明らかに実体化させた「親和力」から後退していると言えるかもしれない。ただ、注③でも触れたように、顔貌の相似の説明は未解明の難問であり、文学的想像力が言わば付け入りやすい領域であることも思い出しておきたい。

これら「親和力」「夢見る女」「白描」は、性行為がないにも関わらず、思いが主観的ないし客観的に子どもに反映

するといふものであった。次に、子が自分以外の男に似て、妻の不義の存在を疑わせるが、夫はそれを否認するといふものとして、アルトゥーア・シュニツラー「アンドレアス・ターマイアーの遺書 (Andreas Thamyers letzter Brief)」(一九〇〇)を見ておこう。

『諸国物語』(一九一五)に収められている森鷗外⁷⁰説で有名なこの作品は、小堀桂一郎が芥川龍之介「二つの手紙」と並べて、『妻に不義をされた男が自分の名譽を糊塗するために、世の常識にはうけいれがたいような現象をひきあいに出し、しかもそれに信憑性を持たせようとして古今の典籍から実例を引用しては何とか人を納得せしめようとする、そうした愚かしい必死の努力のドキュメント』とまとめているが、「押絵の奇蹟」の場合について前章で見たように、援用された『古今の典籍』の援用が全くのナンセンス、「ホラ話」「与太」だと決め付けるのでなければ、ほぼその通りで、白人同士の夫婦に皮膚の黒い子どもが生まれ、懐胎前後の妻の行状に曖昧などがあるにも関わらず、夫は妻の貞操を信じ、世間の嘲笑に対して抗議の自殺を行なうに当って残した『遺書』という形式を取っている。

『此手紙を読む人の小生を狂人と思ふが如きことありては遺憾なる』と述べつつ、見たいものだけ見て見たくない事実には目をつぶるバラノイア的態度、『今日まで種々の書籍に就て、此困難なる、又疑团多き事件に就き取調べ候処、著述家の中には斯様な事実の有り得べきことを疑ふ者少からず候へども、知名の学者にして斯の如き事実の有り得べきことを認め居る者も少からざるやう相見え候』と書籍の記述を味方に付け、縷々紹介するという趣向など、「押絵の奇蹟」と大いに共通性があるが、反語性やベシミズムを特徴とするシュニツラーであれば、小堀の言う通り語り手の夫を専ら冷笑しているかもしれないが、夢野の場合は、冷笑一本槍というよりも、既に見たように違和と共感との入り交じったアンビヴァレントな距離の取り方であった。

さらに、『視覚的胎教』にいくらかでも触れた作品として、E・T・A・ホフマン「スキュデリー嬢」(一八一九)、有島武郎「小さき者へ」(一九一八)、太宰治「雪の夜の話」(一九四四)を見ておこう。

「スキュデリー嬢」は、下田「胎教」でも紹介されているが、森鷗外が「玉を懷いて罪あり」(一八八九)のタイト

ルでかなり自由な翻訳を発表していた。一七世紀のバリで最も腕の良い金細工師ルネ・カルディヤックが、細工を頼まれた宝石を仕上げては依頼人から奪い取っているうちに、殺される。実はカルディヤックの母が妊娠一ヶ月の時に、きらめく宝石の首飾りをして言い寄ってきた騎士が目の前で卒倒死し、その時の強い印象が子のカルディヤックに影響し、金や宝石の装身具に異常なほどの関心を持った人間となっていたのである。悪役の出自の説明として《視覚的胎教》が援用されている。

妻を亡くした男がまだ幼い三人の息子に切々と語りかける「小さき者へ」。その末尾近くに次のようなくだりがある。

その時お前たちの中の一昔年たったものが母上の胎に宿つてゐた。母上は自分でも分らない不思議な望みと恐れとで終始心をなやましてゐた。その頃の母上は殊に美しかった。希臘の母の真仮まかだといつて、部屋の中に、肖像を飾つてゐた。その中にはミネルバの像や、ゲーテや、クロムウェルや、ナイティンゲール女史やの肖像があつた。その少女じみた野心をその時の私は軽い皮肉の心で観てゐたが、今から思うとたゞ笑い捨て、しまふことはどうしても出来ない。

《希臘の母の真似》というのは、《リカスガル「リリユクルゴス」の法律は、スパルタの妻に、強くて美しい人を表はせる美術を見ることを要求した》という古代ギリシャの故事を踏まえたものだろうが、傍線部に示されているような、《視覚的胎教》に対する語り手の微妙な距離感、判断のため、亡き妻への追想性を差し引いても、《胎教》言説の一笑に付しがたい一定のリアリティを窺うことができよう。

有島武郎の長男・行光が生まれたのが一九一一年一月のことであつたから、右のエピソードは一九一〇年頃のことである。それから五年ほどあとの時期における《視覚的胎教》の普及状況を窺わせる文献として、小説ではないが、

野村あらえびす（胡堂）「瓊子の生活から」がある。一九一六年に生まれ一九四〇年に亡くなった娘を追想したこの文章の中に「瓊子が生れた部屋には、ムリロのマドンナの三色版の絵が掲げてあつた。胎教といふことが盛んに称へられた時分で、これは親のささやかなたしなみの一つに過ぎなかつたが、生れた瓊子が、不思議にムリロの描く子供の絵に似て、一種の淨らかさを持つてゐるのを見て、「争はれない気持」になつたことを今でも記憶してゐる。」

「ささやかなたしなみの一つ」とするなど「胎教」に対して冷静な距離が置かれており、本気で信じ込んでゐるわけでもなかつた様子だが、しかし子への期待と不安を抱えた親心の微妙さから全否定もしないという態度であり、この点は、先に見た「小さき者へ」の語り手とも共通する。

太宰治「雪の夜の話」では次のように「視覚的胎教」が描かれている。

せんだつてお嬢さんが、兄さんに、

「綺麗なひとの絵姿を私の部屋の壁に張つて置いて下さいまし。私は毎日それを眺めて、綺麗な子供を産みたうございますから。」と笑ひながらお願いしたら、兄さんは、まじめにうなづき、

「うむ、胎教か。それは大事だ。」

とおつしやつて、孫次郎といふあでやかな能面の写真と、雪の小面という可憐な能面の写真と二枚ならべて壁に張りつけて下さつたところまでは上出来でございましたが、それから、さらにまた、兄さんのしかめつらの写真とその二枚の能面の写真の間に、びたりと張りつけましたので、なんにもなくなりませんでした。

「お願いですから、その、あなたのお写真だけはよして下さい。それを眺めると、私、胸がわるくなつて。」と、おとなしいお嬢さんも、さすがに我慢できなかつたのでせう、拝むやうにして兄さんにたのんで、とにかくそれだけは撤回させてもらひました「略」。本当にお嬢さんはいま、おなかの赤ちゃんのために、この世で一ばん美しいもののばかり眺めてゐたいと思つていらつしやるのだ、けふのこの雪景色を私の眼の底に写して、さうしてお嬢

さんに見せてあげたら、お嬢さんはスルメなんかのお土産より、何倍も何十倍もよろこんで下さるに違ひない。⁸⁰

この作品のポイントは、能面の写真を妊婦に見せるような〈視覚的胎教〉そのものではなく、それをさらにエスカレートさせた〈網膜への視覚映像の保存〉という語り手の若い女性自身が〈科学の上では有り得ない話〉と認めつつも兄から聞いたエピソードを元に信じたいと思っている考え方、その考え方に従って雪景色を自分の目に焼き付けて嫂に見せてあげたいと考えているところにあるのだが、迷信と科学との狭間にあるような〈視覚的胎教〉がその言わば助走となっていることに注意しておこう。⁸¹

こうして小酒井不木「印象」「赦罪」や夢野久作「押絵の奇蹟」ほか、〈視覚的胎教〉が関わる作品をいくつか見て来たが、妊娠（新たな生命の発生）や死に関わる局面、言わば〈生命のリレー〉が発生する局面でこのような発想が引き寄せられやすいということが明らかになった。

語り手が常識的な判断力を持った「小さき者へ」に妻への追慕と幼くして母を亡くしたわが子たちの前途を願う思いとが託されていたのはもちろんのこと、胎教論をエスカレートさせ非科学的な荒唐無稽さを孕んだ「雪の夜の話」などにもやはり胎児の健やかな成長を願う語り手やその兄の思いが託されていた。

妻の妊娠は、また、夫にとって、自分が本当に胎児の父親なのかという疑問を抱えた危機ともなりうる。レズリー・

A・ゼプロウィッツは〈ある人類学者が指摘しているように、こどもが親族のだれに似ているかを確認したがるのは、われわれの生物学的遺伝と、たしかにわが子であることを見届けたいという男たちの関心を反映している。〉⁸²と記すが、これは煎じ詰めれば、例えば、エンゲルス「家族・私有財産・国家の起源」（一八八四）が指摘したような、〈子供たちの唯一の確実な親としての母のこの本源的な地位〉、〈子の母が誰であるかはわかるが、父が誰であるかはわからない〉⁸³という家族論の根源的問題に帰着しよう。妻の遺品から妻の不貞を確信した「夢見る女」、嫉妬深い夫に不義の事実を隠すために必死に〈視覚的胎教〉を試みた妻が語る「赦罪」、夫の浮気へのいささか手の込んだ復讐として、

西洋人との不義から生まれる子に、〈視覚的胎教〉によって鬼の風貌を含意させようとする「印象」。これらの作品はこの根源的問題と無関係ではない。

妻の不義の疑いが濃厚であるにも関わらず、それを否認しようとした時、「アンドレアス・ターマイアーの遺書」におけるように夫は〈狂人〉となつて〈視覚的胎教〉の存在に縋り付く。母の不義について同様のことをすれば、「押絵の奇蹟」のトシ子となる。

そして、「印象」の妻、「アンドレアス・ターマイアーの遺書」の夫、「押絵の奇蹟」の母とトシ子（結核で先が短い）、「小さき者へ」の妻。いずれも、死の影に彩られていたことも忘れてはならないだろう。「アンドレアス・ターマイアーの遺書」「押絵の奇蹟」が遺書（あるいはそれに準じた形）を取っていることは偶然ではない。

以上、迷信・伝承に保存されて来たような〈視覚的胎教〉が、科学的言説と接する境界あたりで、物語を求める人間の心を触発するさまについて、「押絵の奇蹟」を中心に検討してみた。

それによつて、〈視覚的胎教〉に関わる言説が、単なる〈ホラ話〉〈与太〉という水準では考えられなかっただろうということと、そのような言説にしがみつゝ登場人物がしばしば〈狂人〉あるいは〈半狂人〉めいているにしても、そこには生命の誕生に関わる人間のある切羽詰まつた思い、人間の心の真実とも言うべきものが発現していることを明らかにした。

注

- (1) 「第二部二番目のすずめのいうこと」や 第十四章「姥娘」〔新版〕横溝正史全集 14 講談社、一九七五、九七頁上段
- (2) 技報堂、一九四九
- (3) 二五一頁
- (4) 二三四頁

(5) 二五一頁

(6) 以下本稿では、今日差別的と認識される表象に言及するが、本稿の狙いは、人間・社会・文化のありように関する理解を深めるところにあり、差別的助長にはないことを断わっておく。

(7) 〈胎教〉については、後段でさらに詳しく見る。

(8) 松山巖「うわさの誕生—ジャンクヤードの思考」『ユリイカ』一九八九・一、一三四頁

(9) 多田茂治「夢野久作説本」弦書房、二〇〇三、一六八頁

(10) 夢野の本格的デビュー作「あやかしの鼓」が博文館による創作短篇小説懸賞に当選したことの発表が『新青年』のこの号のことであつた。その点からも夢野が「印象」を読んだ可能性は極めて高いと判断される。

(11) 『小酒井不木全集第三卷』改造社、一九二九、二九〇頁

(12) 同、二九五頁

(13) 同、三七六頁

(14) 同、三七六頁

(15) 同、三七七・三七八頁

(16) W. B. Saunders(Philadelphia), 1897. 愛知医科大学図書館(小酒井不木文庫)所蔵の不木旧蔵本(後述)も一八九七年刊のものである。

(17) Telegony, CHAPTER II Prenatal Anomalies, pp.87-89

(18) 前掲『小酒井不木全集第三卷』二九〇頁

(19) Maternal impressions, CHAPTER II, p.81

(20) 原文は次の通り。(When Paré, for example, pictures a monster, we may distrust his art, his artist, or his engraver, and make all due allowance for his primitive knowledge of teratology, coupled with the exaggerations and inventions of the wonder-lover; but when he describes in his own writing what he or his confrères have seen on the battle-field or in the dissecting room, we think, within moderate limits, we owe him credence.)

パレ(Paré, Ambroise, 1510?-1590)はフランス王室公式外科医、「近代外科学の祖」と呼ばれる。著書に『怪物と驚異』(Des Monstres et Prodiges, 1573) ほか。

(21) 総題「不木軒隨筆」中の一編、小酒井光次『西洋医談』克誠堂書店、一九二四、初出未詳

(22) 「妻及び母の科学」中の一編、『小酒井不木全集第十二卷』改造社、一九三〇(初出「婦人公論」一九二六・二)

(23) 浜田雄介編『子不語の夢—江戸川乱歩小酒井不木往復書簡集』(乱歩蔵びらき委員会「発行」、皓星社「発売」、二〇〇四)付録のCD-ROM(収録書簡の画像)によって不木の書き癖等を踏まえつつ、稿者が不木の筆跡であると判断した。

24 底本の句点を、文意から説点に改めた。

25 『小酒井不木全集第六巻』改造社、一九二九、二八三・二八四頁

26 同、二八八頁

27 『夢野久作全集 3』筑摩書房（ちくま文庫）、一九九二、一九二・一九三頁

28 同、一九四頁

29 周知の通り、結核が遺伝病ではないことは今日明らかになっている。

30 前掲『夢野久作全集 3』二二三・二二四頁

31 同、二二八頁

32 同、二二〇・二二七頁

33 同、二二八頁

34 同、二二六頁

35 同、二二七頁

36 同、一七二頁

37 同、一七〇頁

38 同、一五二頁

39 おそらく香澤田中祐吉が著した『医学に関する奇談異聞』（克誠堂書店、一九一七）あたりを意識しながら夢野が創ったタイトルであろう。田中には版を重ねた『法医学講義』（吐鳳堂書店、一九〇八）という著書もあった（一九二三年増訂第七版まで確認）。

40 前掲『夢野久作全集 3』二二五頁

41 他の二つは、次の通りである。

(2) Due to a local influence on the reproductive organs of the mother.

(3) Due to a general influence through the fetus on the mother.

42 実業之日本社、一九一三初版。重版状況については、一九三九・五・五発行の増訂八十版まで確認。引用底本はこの八十版。この書籍については後段で詳しく触れる。

43 「押絵の奇蹟」における整合性とは別に、さらに、夢野の作品史的観点から、これまで夢野の創作とされていた「ドグラ・マグラ」（一九三五）における〈心理遺伝〉説——〈因果伝報〉もしくは「輪廻転生」の科学的原理……すなわち「心理遺伝」（夢野久作全集 9）筑摩書房「ちくま文庫」、一九九二、五七四頁）——への展開も検討される必要がある。

44 東瑞江「押絵の奇蹟」論（『新青年』趣味第十二号、二〇〇五・一二）は、不木の「印象」「妊婦の精神感動と胎児」などにも触れつつ「法医学夜話」に書いてあることは、現在の読者たる私たちの目から見ると荒唐無稽な物語であるが、当時の医学からすれば一つの学説として肯んぜられるものであった可能性もある。しかし、ここでは「法医学夜話」の例は久作が作り上げた与太話に過ぎないわけでは無いことを指摘するだけにとめておく」と記す。作品発表当時の「胎教」言説への追尋がないことが惜しまれるが、重要な方向性を示した論として示唆を受けた。

45 下田次郎について簡単に紹介しておく。一八七二—一九三八。一八九九年から三年間、文部省から女子教育の研究のための留学を命ぜられ、ドイツ、フランス、イギリス、アメリカへ留学。生理学的心理学に基づいた良妻賢母主義的な女子教育論を展開。女子高等師範学校教授。皇晃之「解説下田次郎の経歴・思想と『女子教育』」（下田次郎『女子教育』玉川大学出版部、一九七三）参照。

46 前掲「夢野久作全集」三、一六九頁

47 下田、前掲書、四七頁

48 同、四七頁

49 同、四九・五〇頁

50 主婦之友社、一九二六、三九・四〇頁

51 笠井「物語のウロボロス—日本幻想作家論」筑摩書房（ちくま学芸文庫）、一九九九、八九頁

52 「胎教」の歴史（特に日本におけるそれ）については、田中昌人「発達研究への志」（あいゆうびい「発行」、萌文社「発売」、一九九六）の第Ⅱ部を参照。ここでは、当時の受容状況を窺う参考のために、「婦人家庭百科辞典」（三省堂、一九三七）の「胎教」の項、「家庭教育上近時殊に着目されるところのもので、未だ子が生れないで母の胎内にある間、その母の品行・感情・飲食等の如何が、やがて生れ出るべき子供の素質に影響するといふ説である。故に父母は言行の胎児に及ぼす感化を重視して、妊婦自身は勿論、周囲の人々も妊婦の心身の健全を図るやうに努めねばならぬ。／漢の劉向の「烈女伝」に、周の文王の母が、未だ文王が胎内にある時、その言語・挙動を慎み、夜は人の詩を誦するをきいたので、その母の感化によって後世聖人と仰がれる文王ほどの人を生んだといふことが見えてゐる」という説明を紹介しておくにとどめる。

今日の医学ではどうか。心身医学的観点、すなわち心が体に影響するという観点からも、いたずらに「胎教」が全否定されることはないものの、因果関係は皆目分かっていないというのが実情である。

いろいろな立場があるのが、例えば、小西行郎「知っておきたい子育てのウソ・ホント50—最新赤ちゃん学が教える子育ての新常識」（海童社、二〇〇三）という一般向けの育児書には、（Q）胎教の効果には科学的な根拠がある？／A 現段階では胎教の効果は科学的には解明されていません。／それよりも、これだけはやってはダメだということを知ることが先決です」（一五四頁）、（胎教というとは

く言われるのが、お母さんが心地よい気分ならお腹の赤ちゃんも幸せなはずだという発想です。でも実際のところ、赤ちゃんが気分がいいか、幸せかどうかなんて、誰にもわかりません。胎教がお腹の赤ちゃんにプラスなのかどうかを証明するものは何もないのです。／＼確かに赤ちゃんはお母さんとへその緒でつながり、お母さんの子宮の中で守られて成長します。ですからお母さんが病気をしたり、子宮の状態に異常があつたりすると、赤ちゃんの健康に悪い影響を与えます。お母さんがタバコを吸ったりお酒を飲んだり、強いストレスがあれば、赤ちゃんによくないという、悪いデータはたくさんあります。(一五六・一五七頁)と書かれている。

にもかかわらず「胎教」言説がなくならないのは、田中も指摘するとおり「何とかして良い子を生みたい」との願望は余程特殊でない限り今日一般人の持つている熱望である(前掲書、一〇一頁)からである。科学的に不明・未解明という空白部分には必ず伝承・迷信・疑似科学的言説などが充填されてしまう。そのあたりの機微については、池内了「疑似科学入門」(岩波書店「岩波新書」、二〇〇八)を参照。

53 「パラノイア」の語義は、(ある程度系統化された妄想を特徴とし、関係づけが目立ち、知的減弱は認められず、一般に痴呆化へと進む傾向をもたない慢性精神病。／フロイトは、迫害妄想だけでなく、恋愛妄想、嫉妬妄想、誇大妄想をもパラノイアに分類している。『引用に当って原文のピリオド、コンマを、句読点に改めた。』というラブランシュ、ポントリス「精神分析用語辞典」(村上仁監訳、みすず書房、一九七七)に従う。

54 前掲「夢野久作全集3」一五五頁

55 芥川には事実・現実の相対化を徹底した「蔽の中」(一九二二)もある。

56 「手記」ではないが、志賀直哉「濁った頭」(一九二二)、芥川「河童」(一九二七)など枠として聞き手を配した(「狂人の独白」のもの、それに準じたものとして挙げられよう。

57 前掲「夢野久作全集3」一七二頁

58 笠井、前掲書、八十八頁

59 「趣味の遺伝」において、古来の(生まれ変わり)という因果話を、西洋伝来の新しい科学の言葉(遺伝)と習合させるという構図は、トシ子「八犬伝」のエピソードの証明を法医学の書物に探るのと同型である。一柳廣孝「理科」と漱石「趣味の遺伝」(『国文学』一九九七・五)参照。

60 知られているように夢野には他にも(「狂人が語る」という形式の作品が多々ある。例えば四方田犬彦「解説 狂人は語る」(『夢野久作全集8』筑摩書房、一九九二)を参照。

61 高橋和久・御興哲也訳、朝日出版社、一九八六(原著一九七九)

62 第二部第十三章、柴田翔訳「親和力」講談社(講談社文芸文庫)、一九九七、三六九頁

63 顔の相似の実体化・客観化については、「押絵の奇蹟」も同様だが、人の顔貌の相似が複数の観点の錯綜した事柄であることに注意を払っておく必要がある。ウイトゲンシュタインが『哲学探究』（一九三六・四五）において、諸言語ゲーム間の共通性について、共通の本質の存在を否定するために「家族的類似性」（第一部六七）という比喩表現を用いたわけだが、この表現を比喩から本義に送り返した時に、家族の顔貌の類似性というものが、さまざまな異なった観点から見出すことができるものの、何か本質的な共通性を持ったわけではない、「種々異なる仕方で互いに似通っている」というタイプの類似性であるということ、従って断片的、一面的、恣意的な類似を言いやすいということに気付かされる。近年盛んな「顔学」関係の議論を見てみても、個人認証（人物A⇔人物B）については心理的印象論の域を出ておらず、遺伝学的視点も含め、ほとんど何も分かっていない（原島博「顔学への招待」〔岩波書店、一九九八〕参照）。本稿では「押絵の奇蹟」のトシ子と瑠玉の顔の相似を二応動かぬ「事実」と考えたが、予め不義の存在を想定して類似を探せばそのように見えて来るということもあるだろうから、手鞠歌にまで歌われたという「客観性」をも相対化し、この相似を確定要素としない読み方もあり得るだろう。

64 「親和力」、小松原千里ほか訳「ゲーテ（中）」人文書院、一九八一、四二九頁

65 浜川祥枝「解説親和力」（ゲーテ全集 6）潮出版社、一九七九、四七八頁）より。

66 前掲「夢野久作全集 3」二二六・二二七頁

67 内田能嗣訳、「トマス・ハーディ短編全集第三巻」大阪教育図書、二〇〇二、三九頁

68 六、「石川淳全集第二巻」筑摩書房、一九八九、九五頁

69 三、同、四八頁

70 九、同、一三三頁

71 「白描」については拙著『石川淳作品研究』（双文社出版、二〇〇五）参照（特に二五三頁、注（20））。「白描」には、このような思い人の顔に生んだ子が似るということ以外にも、『貧血派』と『多血派』との『隔世』遺伝、人種と血液との関係など、生物学的奇談ないし疑似科学的言説がいくつも援用されている。

72 初出は『明星』一九〇八・一

73 小堀「アンドレアス・タアマイエルが遺書」と「二つの手紙」『森岡外の世界』講談社、一九七一、四〇六頁（初出『国文学』一九七〇・一一）

74 「アンドレアス・タアマイエルが遺書」『國外全集第三巻』岩波書店、一九七二、三八七頁。前掲小堀論（四〇四・四〇五頁）によれば、國外の『格調の正しい』訳は原文にあった（文章の格の低さ）（すきたらけの冗漫さ）を改変してしまった（二つの大いなる誤訳）

とのことだが、ひとまずこれに擬しておく。

⑥ 小酒井不木同様、シュニッツラーも医者であったことに注意しておいても良いだろう。ただし、作中の書籍には創作（偽書）が多いようだ。

⑦ 国外の作品史を踏まえながら夫の信念への国外の共感を指摘する酒井敏「アンドレアス・タアマイエルが遺書」をめぐって―「豊熱の時代」前夜」（『文藝と批評』一九八三・一〇）のような議論もあり、必ずしも小堀のような読み方に限るまい。

⑧ 有島武郎全集第三巻（筑摩書房、一九八〇、三六五・三六六頁）

⑨ 前掲、下田「胎教」一五六頁。同じく下田が執筆担当した「胎教」（『教育学辞典第三巻』岩波書店、一九三八）にも同様の記述がある。

⑩ 「甲島」第十号、一九四二・四。この文章の存在は、堀部功夫「雪の夜の話」私注（『国語国文』二〇〇四・二）における言及によって知った。

⑪ この絵は、下田「胎教」にも挿画として収載されている。他の挿画は、狩野芳崖「慈母餵音」、チチアン「花」、ソラリオ「聖母」、歌座「乳を吞ます母」、グライネル「母の喜び」（彫刻）、ハッカー「天使の御告」、ブラキシテレス「ヴィナス」（彫刻）、シンデンク「愛児に乳を吞ませる奴隷女」（彫刻）（表記・タイトルは下田に従う）である。

⑫ 「太宰治全集第六巻」筑摩書房、一九九〇、二二〇頁

⑬ 「雪の夜の話」と「胎教」言説との関係については、堀部功夫「雪の夜の話」私注（前掲）、大塚美保「雪の夜の話」論（『太宰治研究』二〇〇四・六）を参照。

⑭ ゼプロウィッツ「顔を説む―顔学への招待」大修館書店、一九九九（原著一九九七）、三五・三六頁

⑮ 戸原四郎訳、岩波書店（岩波文庫）、一九六五、一七、一九頁。引用文は、直接的には古代における一妻多夫制のことだが、一夫一婦制下でも不義（婚外性交）が問われは妥当する。

* 引用文の漢字は、現行の字体に統一し、仮名遣いはそのままとした。引用文中の「」内の言葉、傍線は稿者によるものである。引用底本のルビは煩雑さを避けるために稿者の判断で取捨した。